忠義阿佐倉日記

第三編 貳

特
へ 遠 13
883
12

明治三八年
五月十日
購求

遠
13
883
12

忠勇阿佐倉日記第三編巻之二

東都　松亭金水編次

第三回

豺狼威ふ募る花洛の舘　舊狸怨て述る條原の旅寓

かくて忠義以下の三個ハ旅舎ゞ表坐敷へ通て。農夫們ふうち對ひ。吾ら具ふ商議ゝ。ちかゝ近ちふ首尾ど図らん。とその綜の決しぬまゞ。你達いまゞ國ふ既て。その音信ど相俟べ。若要向のある内ハ。恥ふ恥御ど下ちゝけまゞ。時日ど移さゞ地来れ。今多人数ど。ふ在て。却て善くぬ筋あまゞ。決釈て既れう。と渝ゝふけまゞ。農人們。長達ゞ既れとある。指揮ど辛背んや。ど吾ら花井の大人ど。救ゝんあの一途ゞ。ど生死ど定うゝぬふ志ど半途ふて。

久みん

飯るん遺憾るりるが。是を拒まば長們ごとを用ゐざるの憂あまば頓て國へ退くべしと暴ゐ大勢祀さちて。草鞋脚絆の紐ひき締め。持来り し鉈鍬い一箇ゐ鎌げてうち撞ひさくべとのひて立さまば三個い元の席へ飯て。農人們い吾ゝ流しに。さて今数足いさ〜う。是もあて妻地の繁ぎい辭を見くい安堵せり。とのひも畢らぬゐ宿のゐ奴が。敷居の外ゐ顔着て甲賀さるの山能ゐ。四書付糸りて。とのひゐ出立を虎次郎。うけとるまとと成るに。阿佐倉の郷の荘屋ども。と徳あまば此方へ出。一同ゐ拔きそ〜人まば中索ぬる仔細ゐまば。千葉忠兵高須虎次郎。勝間田の重三郎。その他眺夜門前へ来やる農民のうち。重立う者両三個ゐ今糸るべくゆと。と思めあまば忠義いうち点灯て然もあ〜ん。今朝未明ゐの砂法のあべう

りゐと思ひう。是い吾們いうるまば。農民們を唆うゐ。ゐ強援ゐ及をせ〜ぞ。るどそ速ゐ法めざると。結ん〜ゐの疑惑るり。新名茶い連れられど。今見い在下一個ゐ。重三郎と虎次郎いゐ。の農人等を右連て。國へ飯をゆとゆし立るべ仔細ゐ〜ゐ。ゐくて酷更等言葉を巧ゐ。詰るとも機ゐ隙こ。変ゐ疲ぞ回着て微さんい方すのうちゐ。さまば各い奥まりうる所ゐ隙まて人ゐる足元を。和て三個等一百さそい後日の為宜〜ゐ。万一在下取拉られて。二三日も飯らばい歯下足下等高後て。再び上京のようとひ。悲訴をるとも隙ぞ〜。左右ゐ。ゐ年い暮ゐん。然るゐ。ゐい歯吾ぬが。ゐ。ゐ軍家へ訴るゐ。ゐ。ゐ遠ゐ〜ゐ。よく心得て。ゐの。程ゐく討らひゐひて。よゐ。ゐまでいるゐ。ゐるゐ。歯吾ぬゐ大切の身他ゐのようい。ゐ。ゐ。ゐ。ぬ。ゐ。ゐ。ゐ未まば飯らば。と吾ゐ。ゐ。ゐ足下ゐ。

其如くに回答をなすと遺る方なくいひあきてそや仕んとまる辨をうみて。荒次郎八雲時と注め。弁八逸て兼知せう。然れども今日の一挙はさぞ仮初のことにあらで。足下が性命に及ぶまじ。在下もきて夫々の回答を做てかくべきに足下八跡を止まりて万事の手配を做しめんとの人ど忠義出いまび文八猟の雅易に因て甲乙を撰むにあらび。花井父子に亞りのい千葉邑の忠義と不肖なれども知縣の記録にあるとりてまづ在下が性ぞい発を被るべ。所人の系る所にあらび。と理を推まそいようるく。然らば命に任せと。両個い領兼みすにより。忠義八宿のに如ぬと。人従へて喘と甲斐の鉄へ到つまるこのようを通下げまび。先吸入れて法場図円自例へ。ち出案に差いぞ。体们二個をたるにみどそで一個未匡と詰まび忠義箇様とこと。帰まるようといひるに図円い扇を効にまり。

まづ汲て性夜の浴方。農人们及び汝ぞが計らひ言信用あるまび上ようい残び縛め。乳明せよこのれ位あるまど。私て人殺人の雅義に及ぶと吾こ深き仁恵とりて。その方許し退ぞせ。今更別に発むるべ。ぞこの以来右の如き乱物をるすや為ぞや。農人们に問んと思ひたるまどの逸早く。既てしとあべ丈まぞこ。他今自別院にいべくに阿佐倉の郷三十箇箇村人別男女残のやく。騒人云上しあるの処この節伝の所消ありや。摂さて負ひ老ると伴ひ日と後に雖散。七人別姑半を減ぞ。私て二両月と帰るに至らび人民子遺あべざるべ。と阿佐倉の知縣愛智川へ新関を張て出入を改さる。夜八一切に従来を許さるこの注進あり。思に芝居茶屋グ殺花井麦吾。先日黄金の多覚をとりをあへ出るよ。安堂院に言ぞ。を後に及び私の処に発動あり。て帰り来らび。剣へ

その渾家とて代官の動静を窺はせ。其後よりして農民們五六十人、きそひ登り門前と礼姿いさぎよく。色こゝる集り胸中の鬱を晴さん然も為さば吾と玉花怖と憤き。父老あるを宥めつゝ制故す。敢ち返さんとす拔き覚と推量る。

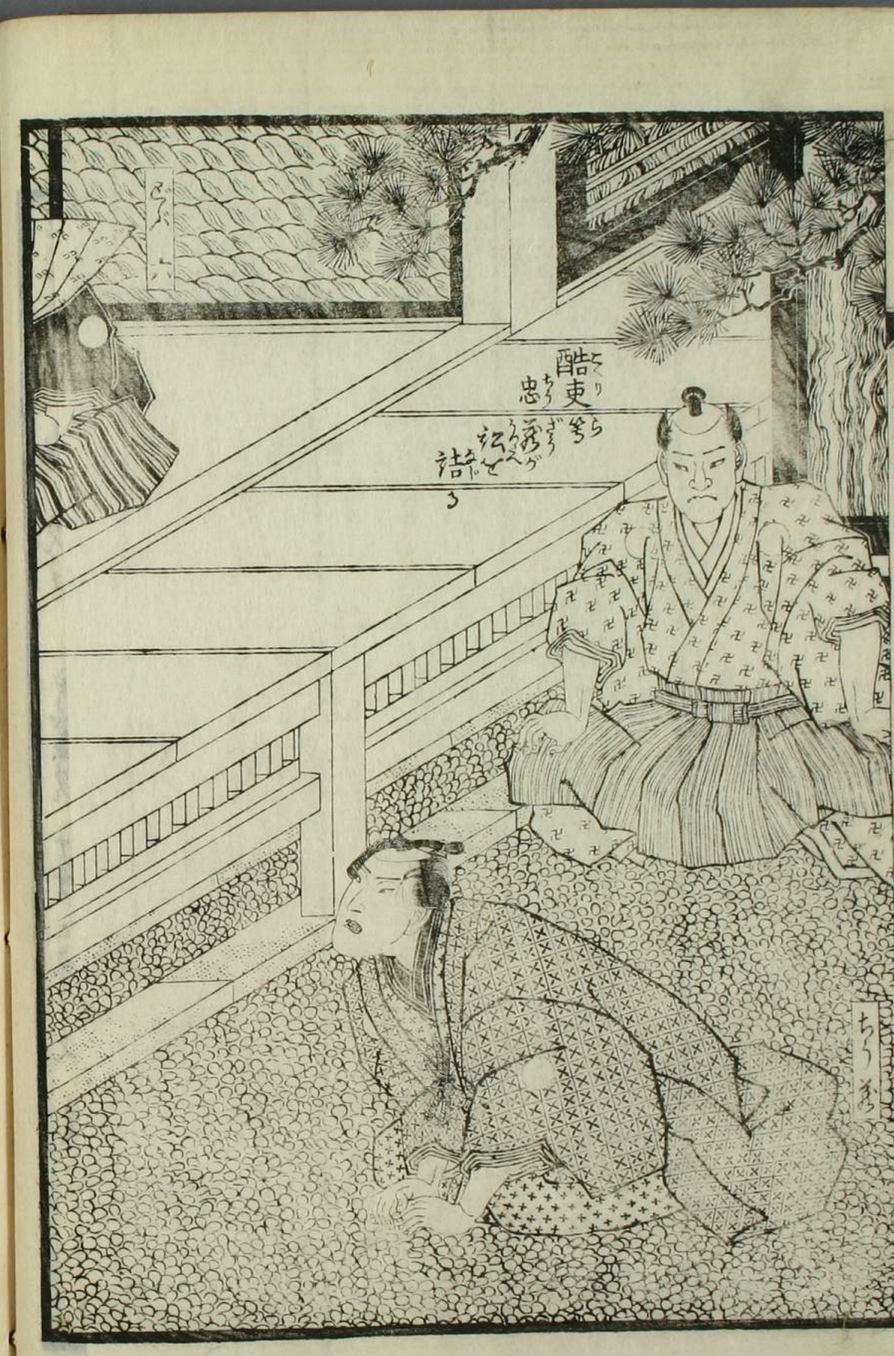
然るを荒智の農民們吾あるとを知つて領をある成辨へまで。愛うさまて家と弁妻ふと倶に若枝城ふ山城大和侍従の玉所縁ふ陸と隣玉へ逐電ふ兄と云ふ。固より愚人に服ふ是ちに汝等いそのゝ死として年うまを生る流し得ざる。若も吾と同家ふ逃ることもよも遁さじ。猟銃ふ逃て生恥と世界へ晒を美濃尾張近ふ入る大守より。ゝ船と阿佐倉の玉奉人と逗る地なり。よく心得て早ふ雖散ゝる農民們をそゝく在所へ行戻せ。まさ加多ふ吾が住方。少出しるべ頓弘へよ。かく人民と統がす辨者。仇

明るとその罪ふ行ふべしとの厳命あり。故ふ你們と呼出ふ。佐度ゝ一渡さん為あり。僅こゝ云得て懈るゝと美まて忠義ふ命令逸と畏こゝ。さて忍ゝ下僕が言しあるを少ゝ。吾が為人上をまんど下を慢れゝ人を先ゝ已を渡ふ。殺寡うして性ゝ涼く。他人の折磨とゝる時ハ身を顧ずこれを救ふ。固よりその性温順ある人と評たゞ人ふ涙を家職ふ怠らゞ現ふ孝あり。その除い推て知しる人斯のゝくの性質あるゝ組合上よりゝ的わどある。雖泥非道の命令あるとも。ゝを憤ゝて愚痴蒙昧ある農人們と愛し。雖散を勧や礼拝の渡ふ是ゝいゝをりのふあゝ洗ふ逆回の裸仏の黄金も。貧窮戸毎の農民ふ出させゝその艱苦と月ゝふ忍びゝと先祖より。什未ゝ田畠を勿論五六箇所ある山林もゝある近郷へ沽却して。聊ゝ黄金と教ゝ戸毎へ出す出せ。

此の如きの悪者あるに、農民們も中心に欺びぞひて德を慕ふ。然るにその罪
悪を糾さずして、罪科もあざるに、象潟まで曳れと、笑て各義を励まし、殺いん
もて出さるべし。誰ひとりとして咬う。勿もる去のいべき。然るに吾いその日以来、我
覺の為に、伊勢美濃の友人来るとい。下僕等ふも通達るに、既に発足
いさしたり。今に於て家に戻らば、こは於て農民們父母に奇一ぞひ微を畫
吾ごに彩の恥。その跡を遂ふ者ごと思惟ふて。故郷を立
退あそいひあん。かくてさいの嗚呼ものごと。むう大至邪ふとり。狀人の侵を
りん。避て岐山の下に居ふ。邪の百姓ことを釈て大きい仁人なり。必失なりへ
らば。と疑ひ来ると。旅人の市に帰るがはしとの人。実吾に国より男凡ぞそれ
ふい遠く及ぶと。農民們が離散の恐を。彷徨ふりのるう恐れが所りくい

這回の。課役と悪く免除あり。実なるものと迷ふ。故郷へ帰り。場まるのなり。
離散の老も。忽地ふ。病地へ帰と。恭平といて奥徒と。伴ぎ奉らん
のあそい。此旨宜敷く。仲俵あるとて。免ーあり。大慶ふ。と悼る。外ふく演
けまい。国内い忽地大に興さ。差ぞのう。実吾厨と一ツ穴の古狸。婆も。伝芸
ふ。愚昧の族と。咬ーふ。若夫ふ。其分ふ。拾ふるぞと大喝ふて。白
眼つもとい忠義い。忍ま入て頭と摸け。かくまを。程非と。明白ふ云ー上ひ
こも。まぎれ。得心ふるぬふ。下僕数代に恩と。戴さ。いつを邪ふることを。微さん。
その。疑ひの人ふとそうを。近来に。眼鑑差ひ。と。忍まるぐ。存ぎるとえふ
この時ふ。目未の。乱性。可色めども。畏ぐふて。面ふ。怒ーと。彰いせい。後の。隣
紙。と。披さて。ぐち。出さる。章。長大。冷笑ひて。国門。刀。称。佞辯。邪智なる

くん家太
うめ


酷吏
忠義
紅せ詰
さうか
ちうき

阿佐倉の莊屋どもと糺さるゝに甚以て寛慢ゝ。乞在下が委敷代を
実と吐せんせやさんは除あると傍へ引除やと是忠義作が云分下と
く上と侮る。且吾ことゝて愚人とるす条以の外なる所怪なり。爰五郎と汝い
先年より兄弟の約を結び。爰吾が渾家い汝が為ふ孫ふの女ゆゑ妹れ
べ弟猪渠と計て心を合て三十餘箇村進退自在と做まりのあるに隙の
莊屋とゝ斉一ゝ。迚四爰吾が他ふの一條まゝ農民們が徒黨教唆と汝
いつぐゝ為ゝ。然るを吾們宥恕して初ゝ度と通すことれ云の
恭愛あるといゝくも爰作課せと言渡て牧上と延る汝奸賊ゝ搦て拷問
せゞい実と吐ゞと居丈合問ふ詰れば爰下忠義怒ふ涙流を強て顧ふ
ふ大人の故通を上て両個とも四段ふ分て昔日の怨ゝとふ晴さん為と怒れ

十分ふ胸ふ逆ゝ抜出んとして腎ゝ動くだろふ者を不ゝど怨地心と丹田ふ。
隙つけて思ふ。渠等ゞ今のに按振い爰吾といて憎むるゝ若ゝ爰が
引縛ゝ有ゝるものゝ世ゞ牢獄へ下さんとまる威勢あゝ。元来此方ふ者ゝ
究とゝの人ども渠い権あゝ。ゝ敬まることゝ汚んとゝもまゝ言得さゝ世ゞ
後ことゝ為ゝ追あゝ。且今とゝふ命と捨て渠等と撃とゝ主家の難と清
うまるふ知ゝ。まゞ且く怒ゝを忍び。緯と計ふ為ゝ。ゝ思ひ定め
て面と和らげ。ことゝ為ゝ。その由緒爰一類い理あゝふ他さまゞ爰五郎ゝ
先祖什代住別ゝ地ふ離ま農民どもを連累して他ゝ徒ゝ出ゝと為ゝ例の
栄ゝとまゝあゝ。況や吾ゝい将如此なり。決て其非のことふあゝ。渠等宅
の遅ゝい黄金の方覚届ゝあるべゝ。ゝ農民們の散乱做まゝ。今

防ぎて来りぬ。後き入る術なし。聊爾仕らば。既に生死を争ふ。
殺人の者と敵へ来り。重三郎と虎次郎。二人ふことを蓋国さを今の
国許へ飯らーる。支めんも難し。一人の逃ふ眼傷ひて故郷へ帰り
り一人さふ散乱ひさ者あるべとて流り。引戻しかべ。とのふ軍義太の
ふ言と傾け。和ひいたをありけるが頼て国内てんかり。渠既ふ必ずもく
うへ上へ対し。逆ふの罪ひさう許し。頼西依金人飯らーて。離乱て止むる計らひを
做さーめんと考へ如何ふ彼の義ひ花ひ者と農民ども心乗ひ家の大愚
この強いさひめ。向れて国内ひ輩義太が已ふ為ひて人を専ら排除ひさる
ふ拠る。筒の先鋒とひて。出てらるる心裡ふ憤と表れがらの時ふ。
左ひと回答。にて鉾ひたありるるべ。輩義太ひ強て同ど忠義ふ対ひ。

彼ど分解事無ふ。朝礼ひて実否を糺ひべけるとの。農民ども
動乱ひ安ひるひふ。ふ教の急務ひ。彼が願ひの旨ふ任せ今ひ暇を賜る
ひどふ。一刻ひて安ひ帰ひて退去の者を引纏めよ。その功ふよべ毛末での罪
許さ力ひもあーん。く務めて怠るべと厳重ふひひとさせば忠義ひ畏こそ。
然らば暇給てんと。急ぎ解散ひ。二條ひる旅屋人庄屋以下
の三個ふむる人今日の首尾如此ひるとべ在下いまの国へ飯て。退去を往
むるふ在ひたる。その容を見んとの。勿論高須勝間田の両貴見農民
ども。引連て今朝庄屋ひ。と備前ひ。ひて長屋ふ在らず在
下と倶ふ飯て。戸毎て怪むるが所要ひ。ん。と。ひて妻吾ひ。ひ。ひ。
の云葉ふ道理頓如此ふ計ひ人。依在下ひるるべ。かくまで人の情を

諸国を巡り、日々の手習に精を出すを為ると云へるなり。彩いえで女こゝも。
抱て帰るを、他人大丈夫の兵ひとをまるのみぐら。筆ふまび二十七年。九の表紙の
怪異と祝ひ、毎日無気味に仕て盗賊を利用てゐるゆゑ、手習に精をゐるゝん
とゝ。然るに日々の労に於て、よるの紀功績と為るも。郷人に昇格せ寺
へ般まで禅師の作ふ人と狂惑し怪とるす。出盗物のあるゐぐ千年と死
りの。草木とゐ人ど金霊あり。況や生類に於てとや。ゐるまび厚くことを
恭ふ。後日の崇るゝん。漢経しとゐ。せんと程を拘ふ多ひけまび得
脱せゐる能ひる。と人ゐ多ひて吾も。そひて。ちの後に更に懸念せ。三十
ふをゝ年を送り。今茲親戚朋友の猥ふあひてゐも後ま心も弱ゐ
所へ着込崇るを儆をとあゞを。一昨日碧井の茶店ふて父の墓を空

ゐ宿へ程の近ゐを道引差て京師の方。斥附も早くと心ゐけど。
足の運びの捗ゐを。保原へ到ゐ。夜の手刻ともあゞ一家み
立ゐて。その夜の宿を特ゐふ。年閑ゐ夫婦の人易きゐとて頃
法ゐひ。いと老実ゐる給仕ふ心地井ゐ。憩ゐ一室ふ入を。
頃何方と日ゐく手習。雅一枚況ひま出来。吾よりまを強まるや。吾ハ
堅田の古館ふて。你が為ふ敬ゐる。命を取まゐちの報を。敬さぬやとゐ
年月忘を間ひゐ。祝ゐ。法天善神の加護ふ依て。傍者ゐの協ひざ。
この程運命を衰へ土地を去て所を呻吟ゐの虚ふ。ゐて祝ゐまを。
掴ミ蕙らんとゐるゐど。ふ。這ハ物ゐや生ゐゐちもゐ。双向ゐのゐゐるふ。
死に手ゐ吾ふ敬せん。立退ゐと叫ゐの。刀を引抜斬掛ふと。ゐを

所にかの夫婦ハ何者に殺されてや。死出の旅客。物に魘ハれまじきものかハ。頓眼を覚しぬ人とハ揺起されて驚きつ。彼ハ夢にてありけるよと渾身の汗ハ絞るばかりなり。こゝに於て熟思ふに因果の眼さへも露ならぬ疑の影のごとし。吾少年にして思慮浅く。古鉞に到る蠱物を刺留たる勇に似たれど主命なれバ人にも憑れまじ。畢竟無益の闇思君なれ。物の命は己やしまぬ後に必人が罪深きを知れども人間の暑身大に異るまじ。軽く怨こを復まに卸ぞ。今こそ心神困迷する故とて崇あるらんと悟りて困惑せるにつけ。途田の一挙人の為に心を悩まし賊を責し。既に路上に立にあたるべき。上ぞ人殺是を数せバ。却て種々の不審をうけ。何れ千隔満漢子とありて天高けれど跼まり地ハ厚けれど蹐まれど。進退の度を失へ余ことは是

不善の因に拠ならざれバ従来の弱冠にして勇を好み才を恃みて無益に物の命を掫しに具徒を損ふ如きハせざることを上策なりと誡めにてよき不為なりしと諺にいへど忠孝の為にあらざれバかの蚕猫を刺留たるハ足下と在下と両個にある故にかく折磨の人になりて難澁を重ぬるにや。物の命を掫しものそく報いを票るハ。むかし釈迦にもいとたかく申されし殊にたけさる奥福あるの沙門永興が紀伊の国熊野に在しとき。人病ありて祈祝をも乞ひしに永興かさて是をみるに病者種々の謗語を激し。吾ハ此者の為に殺されたる狐なり。今讐を報ふ。禅師なりとも祈るとも去らじとて狂ひさけびて竟に死たる後数年を経て一人の僧物のけに悩ひ殺さる。一夜禅師の夢に現はれ吾ハ曽に狐の為に狂ひ死しける漢士なるが。今狗と生れたり。その時の狐ハ僧となれる故なりとて僧を咬殺し。その讐を報いし

なりといひ畢てもち逃ぬ斯のやきハ未来永劫その縁の絶る期なし。また鳥
を射て生るが麥畠に引入られ地獄の苦患を稟しもあり式ひハ播磨の国
澄於寺の邊に漁をなせる者。家内竹林に入て熱やくと叫び苦しむを悉癒
大德赦ひ佐けし故事ハ。載て日本霊異記にみえたるも是殺生の報ひなど
書くハ然らざるも浅茅原院の凡時に女院八條殿にて上ろうせのハ然るにとに
妖怪ありとて庄田若狭守司頼慶が。まづ六位にて在しときに是をもて現して
奈良よりの令をうけて彼処へ至るに六日に及びて怪しきなし。扨七月めの
夜に至て頼慶が首の上に土器の如きを懸なく吹喇とと擲れり。頼慶彼
こそと思ひしと他その形状黒きもの。飛来るを把て押へ指貫の括を脱ちて生
おぐる院の御所へ牽めて来るに稀猫狸の毛もる死にてありけるとぞ。また水無瀬

の山奥に池あり。水鳥多く群居たりしが。彼処へ由りし人取といへる者ありて人を
取といひ傳へ怖れて彼処へ由くものなし。播磨なる仲俊ハ上北面にて心剛なり。一人
かの池へ由きて鳥を捕しが果して傍なる松が枝に異形の者の現れしかバ彼奴よと弓に
矢を番へて放に貌ハ消失ぬされバとて闇にまぎれ松が枝に往て射るまでに四五面
聞て癖者ハ何かと仲俊が傍へ来るに一団の光あり。その中に白髪なる嫗ありて
荒示とも笑ふ仲俊左右の手を廣げ頭をつかまへて組みて押へてさし殺せバ
手稀猫狸となりにけり。されバ仲俊が勇名四方に聞えたり。頼慶ハ薨命なれど仲
俊ハこを逃犯して先為の殺生とのべど崇ありしと夜も及ばで足下日来ハ勇壮に
て動するとある化性なれど大人が因となりしより寝食ても安んぜだ心を悩らし
めたる因て然るなりても有めるひろ。如夢幻泡影の喩えすべ足下も縁てよく知を

其の悪むべき處を積みて漫に心を労しけるが。這回の事は領主の非なり且酷吏が苛政にして和漢に例なき事にあらず。危邦に入らず乱邦に居らず。吾とてもまた其の虐を避て遠き所に隠れんは安けれど。数代この地の長として人の尊敬を受るぞ。かゝる時節に先達て他の先途と為るは義を失ふのみならず故郷倶と不親者と背る人も来その任にあらざれば。もとより生死ともに覚りがたき足下が訟へ止むべきを止めず。吾身損ぜんとも何ぞそれ猶その任にあるべくとだも非得失を爽に深けれども甞て吾を始め重三郎も虎次郎もみなその議論に服しぬ然らば今より吾ら一同阿佐倉へ立越べしと暴にとも立出さり

第四回　苛政を忍れて農民故郷を退る　於千代が勇気蘭を援ふ

斯て忠義なる三個のものは阿佐倉へ帰りしが。家に止まる暇なければ直に邑を巡りみるに僅四五日の間にして家々の郭は壊れ墻垣毀し様て列なる或ひは五七人住居せしも漸く一個両個居て聊ありつる家財さへ何方へか運び除て。淋しく空き屋を遺る。ひとり茶師と董蒋太等が一家のみ住なぞ違乱とに散乱なせしと覚えたり。浅猪さへ限りなく一家とさし覗けば七十ぢかきの老翁が薪ひとつを傍におき曲突を扶て居たりけるが。その老人も縁までより總るものにありけるが重三郎と虎次郎の手を執にいたく悦びて眼より涙を流しくれば振返て長く為るより席を改め佐々の頃の様がさるにあの如く家毎に会へ人をらずなりぬ。己が孫子も昨夜出ぬ。その身も伴なへんと誘けれども動きもせせらず。種々の風波にあひしのみか。亡き先祖の宛ても今に災ひの罪を犯せし覚え

當吾夏中ハ
怪異と祝る
妻吉

元もあれと周章て蹈ることもあらん。まのこゝに陋しき身も。狂元組より懷
らまする。家を捨て他地へ往んと一人此処へ止まりぬ。法の他の風俗に累はる長
震衣かまを拾め貴客をも旦一客に上鑵に及ぶ。今より家毎に酒迄で金銀
の有る限りを。知縣へ把上さるべく咎る故さゝぬ。ざ両四
深級に成ぬ人ゝ。ざ
りて世を送んと。若しこの地を退んあへと人自勧めを。能あつて書付をせる
人もあゝ。ど。三十俵箇村にもあくと。妻子を引連て父母を捕て退去
まるりの半に過ぎを。知縣へ申ふもちろの事空元出にと。下司を勢を出て
とまを捕まど。野城山城蹈るもあり。また下司を深調て。礼妨あって他
ありて暴に人を乳の繋を出ぬまで。了得知縣の威勢に。如何とも詮方なく

新関を居おきて。厳重に賞客を護るのこ。然るに賞客を事なくて立死敗
りの人を人ゝ角の風俗ゝ。この虚云ふて。天物をどの野盗なる乞者老中
悲不端絶まり。家を守りて微妙きと信ると。なて然もあゝ。如何に
苛政の行つることも。元より乏しき農民の家を探して金銀の有る限りを
算をとる人。狼藉のあるべきや。這い笑ふに絶ることなり。また上京をうとも。
滝澤の六左衛門。まと賞分荘屋に雇ひ。喜代平るどの老分ありこれを
流して絶むべきに。然るに不審然いあまり方及でぬるのあり。とゝ人ゝ紀その
こと。いまゞ雪知りのいぬれ。人を教乱まるに及び。両個とも知縣へ呼まて。汝等の
業吾に共。農民们を使ふて。請ふ逃去せ。ある条村長にある程き罪
深重なりとあつて。知縣の牢獄へ下さまり。ぬるに喜代平力松へ眠日暮る

獄屋あり。死るまさとをんの人用心をふ絶て気の毒なれ。高須の長ず門方さ。
先須ゑまー蘭四肩。良人ハ在洛で石筋らまを又い獄屋で失さうとその悩の
隠まもあ〻後ハ。天ふあくゞを地ふ俯拝び。歌ハ踊りふふー流を心狂ひて
夜さり。家を狂出ーめひてう。今ふ行方いをまびとよ。と話説半も空果ば虎
次郎ハ跡方ふ在ーが。進て出てこ来籠をまいぢ紀ふるゝや。己こそ今悩ふ
もる。高須の長の虎次郎を三個倶く糸師より。元幸ふ改まど邑との。初静を
ふるゞ急勢ゑまび。家ふも入らび巡を居り。殊ふ高須の最寄へも。いまゞ往
祝び炒も世び。と捜くゝふ忠義も。重三郎も驚きて。先ゝ引て壁然ふ。物を憐
まむ心さえ。と涙けまび。ゑひ迫を。世ふ頼こゑ紀方を然こそ。瀬川へや流こん。
まゞ諸倶ふ頼四こそ。実者を改んと忠義が。先ふ立て走を出まび然いとそ

両個も据端打て乗が如くふ郷里をゆ。あふ社千代を不憐も。良人ふ遭て密
ふて逃。郷人ふ伴ゑ紀を家人ふ為まび邑る老掘が。忠義より特まを。
男子両個の世話をふ在ける故ふ糸師のさゑも。如世さゑりと初治今日翌と
遅をゞふ洛ふ遺を。四五十人の郷人も追をふ帰や来ーゞ雑ゝとるゝ。若
橋の人民流黨ゝを上舘を噪が世る。怒めふ用て歩吾を張め。忠義重三郎
虎次郎の四個をふ及筋らまを。良ゝ洛へ出ーを。逃をふ搦め捕と
の。風炒隠まあ〻ゝを置ゝと罵るれゞふ思慮もなる紀農民ハ忽地怨怖
の足ひを生ーさゝび及捕の未ざる間ふ。逃まゞを辛き目ゝんと暴ふ発紀
を刺ゝ付ーまゝと土地を去まび果ふいあ〻ぬ虚云を。撫へ出ゝりめさ
あまを。阿佐倉一郷の騒ぎとるゝ。邑毎潮の涌が如く。竪横ふ混雑ゝ

於千代いその姉の是を伝ぜば。鮫骨多郷人等伝のるとて吹出して。あるを多て罵るぞと云ひ取てありるが。脇ふ教孔の者多く。因て六右衛門喜代平の。知縣へ召絡られ。と吹佛ハ実のことなれども。奈山が生死の際さへ。定らるるを知ふ良人まで。捕絡られてゝ何ふせんと胸潤式さんん坐ふ申さまゝ。さるくふ沉吟す。重三郎が妻の姉妹ハ六右衛門の女児なるを。まづ渠を訊て勃然てきて。この後の工夫を錐をゝ。と物向因仔て去ち出しハ。と夜文の刻ふ近き頃なり。家森林の暇た月の光まも冬の夜を。悽さ詠猶のこるゝ。蕭索る風の音。藻の氷を吹送て。肌膚も勃く如くなるふ。常ゞふ徒素ハ稀なるを。この頃の淋しさハ遠の火影も眼央んゞ。ろ得難きき心さ入何とるく弱てあるかる折ゝ佐けを佐けて給

と女の殺叫ぶを吹て立上て。何なるりやと窺ふ。右手の方ふ旅高く。牛の寝藁を積あげる。傍ハ稲叢あるて。月影さ入ふ冷さり。於千代い首をさ一伸て。その程と眺をるふ。ち丐ハあゝんちの客の身しげなるゞ女を抱人戯燥とする為雅女いとを振解きて。逃さんとまゝど辞ハ分ふ任ゝ引居らまを叫ぶなり。於千代い妻の窺ひを。心急まを見と早めて。ち逃んとゝ。ま女をあまを一郷の長とのいゝ花井が渾家。看為ふ未良のまあを。祝ゞ迎んハ去ふ申ゝを。僥倖夜ゝの守護ふを。腰刀を帯ゝ。カらん内の為ゝと。胸引居て立戻を。汝何なるの兇児なるを。カゝる夜陰ふ女を抱ハ引剥せんと。戯燥んと。女ハ是ゞ。豪者が渾家。眼ふ注つて。拵ゝ。と大ふ罵ゝて。刑五あゞり。俾者ゞハふすると候ふ。ち丐ハ

花井とりて名を安てうんまでの女の唯一個更ふ忍るべきうれど彼人の仁者
とうの方の徳と作ぐうるふ方の渾家ふ対し嫌と做さんい天の照覧日恨しと
思ひとりてもの方を敬し女とも処ふ拵あれて物ともいもど逃失さう量下女
立上り。尼ふ言折ふ来あいて。救ひのひ厚き。よとりて敬て金い蘭あり。
千代い再び怕やして。ちんが分ありとの只ひもよく祝と泣叫ぶ嘆と泣ふ見びず。女
どもふ何やしが。渠方の侍ふ逃失しい。吾倫ふ新しも儀俳。若彼色と頼抵
あり。この腰刀を引抜て。挑まんと思ひつる。その金や達きん。まど死ふ方の秘
ひ。さそりるのまびあの美夜中。何処へとり迷ひ出る。その秋詳ふ受しめとりべば
蘭験と拭ひ。別の仕網ふ来祝ども。此頃の世の強ゲさ良人い系師へ弘へて
て仕ろうんと強めんとうち出るゲ今ふ祝ら伝受い夫婦の科ふよう。花源を獄

舎へ入やしとりふ。夫のころ〳〵ず又喜代平仮の荘屋ふ庭いまて。濱ふ人と強め
ふ。ろ〳〵ふ行日達ゲび。色ふ用て知縣へ行まて。獄舎へ繋ゲまし。と受ゲふ
胸うち裏くるふ。知ろうやく年老て。ろ弱くありてろふ二夜三夜眠りやう
む。労まし上ふ獄舎の若き。ふ悩を死せりと。死ゲ悲しさの数稼を存命
べくのあるまで。歎き沉めどもの甲斐なく。存まま左まま花源へ死ひ。良人
も用ふ陽ふとあるぬ。歎ふあるぬ。その実方と受定め。この男の受人情ゆさを
やと知る旅路日程をあり。夜と日ふ嗣で系師へ登る。彼方此方で陽ふ。
悩とさふもの人へ。昨日所仕舎へ飯ら。ま〳〵と宣ふ受て歎きのゆふ。御安協
の民ひて傲し。大津とやらんで早発と花ひて。ろ〳〵ら世ふ。この境まで来ふ
けるゲ。夜あい今まで日楽日い知りぬ。と復と返て唯一人考ゲて閑る暇方ら

丹の為に捕へらるとあるを私に曝さんと欲せしを為方が素かやうに哀れ
も殺すまじい死するのく種を心地せるとて拝くばりと成て孫代も完示の哀れ
実なる人の情実なるべいかるべく哀代平ぬも滝沢の左右衛門ぬも捨ぬ
しとあまべ死後方へ従ま一人の子のまず哀れ為方へ重
ざ
三ぬの内方ぬ為後せぬ。とそれ出なる途中なり。然べ作ぬ為の便宜の知
ともあるんと実より両個連れて。彷徨内へ知り。殺妹ぬあんと夏の心と作り出の
徳さまの。然もあべ三個の人のそや家ぬ帰ると来ん。然ぬ系師心蘭が
もまと虚言れいと不審と成。十代と為。右さるなるの哀れ折る動地さ重
三郎が先ぬ五ぬ忠義と。虎次郎の三個ぬ。程へ入るとこ三個の女へ呆ぬ
とそぬ孫一人と。さ処へ近出ると。今秀の次第と詞短ぬ。話まぬ忠義

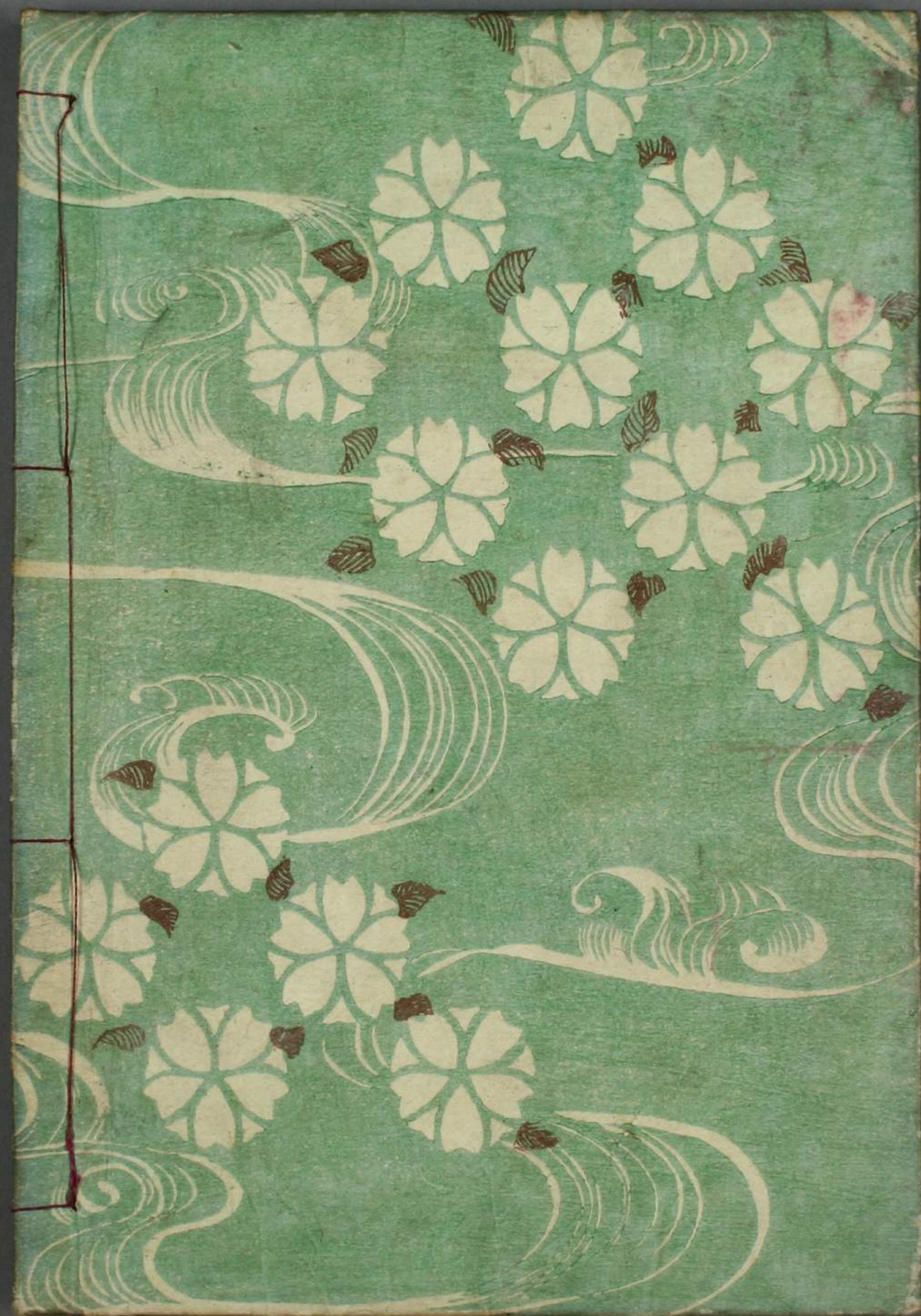
然もあり一ら神ぬ子ぬ子ぬ子ぬ蘭が欲と成ぬ出て仇方の報
ぬと出まるこ三個高須へ出て家復る僕ぬ容ぬとさけべ一昨日の夜のとる
まき。不審家出せるまるより。強きて心当りの隠くと探せども更ぬ仕方な
一
初ようる。然まべ狂る喜代平力私ぬ為ぬ一と思べども見さえ知難へ
まて法師まのへ私べ性方ぬ。村長ぬ方ぬ。ぬ地ぬ居ら是私べ彼が
招揮と受べき粥ぬ。寺祇業倭ひが今ぬ欲と在所と知べ。ぬ関と
いと不審と。家掲ぬ到ぬ。千代ぬ遭て。強べ動揺と知るよ。
被処へ推と見ぬ猶ぬ因ぬ要ぬ。と稚児と吾俗ぬ頭け一個出ぬ。
の光堀がいぬ。さべと赤頭と廻ら一端と。まと。蘭ぬ。ぬ在。
まさ各の葉ぬらまさる。重三力私と為ら。高須ぬ五ぬ。光事で面会

三女集會して
あのく良人の
なげき

身の上を張る
おち上
あき

ある足の辛慶若ハ清代平刀称よりなる彼の荘屋に持まで知縣へ曳れ獄舎あ
し死せしにハ安言なる不幸といへんも磯りあり。殊に滝澤の六右衛門も擒になる
しかる。姉妹刀称にも愁傷なさんとの節のこと何まで积ても不幸なるざる方ハすゞ。
まへの在も夜も今宵一夜ハ甘ごとくに若を都への商賈もまさべき久。吾とも
今日一日徘徊ましていまて労まに腹さへもよく耗さり。飯にまま酒にまま酒倫し
てよと旅千代に人へバ姉妹も蘭も倶にたち厨へ到りて在合せるの食物をね
出し。人々に喰せて後蘭ハ良人なる虎次郎の傍へ侍まその者の上へを案まど
る绎の卦きまゝ喜代平が獄舎の苦艱のこゝ多き死しくその風姿ハ虚云と
も咬敵さまざん。今年いるる禍の神の崇すも移ろり。苦労に歎きと幸め
はなるんと妻も惜まで泣伏も世方ハ重三郎夫婦が悲歎如何にも来く

六右衛門が苦艱を早く救ハざれバ是もまさ老年なり。生死の程もはかり
まだ。と太く心を悩せるべし。旅千代ハ忠義にたち対ひ良人が良人を見ふ
向ひいるまでバ這回ハ緒倶に帰りまざる。但し恭ふを救ふべきよしのありてお
跡に遺まし。その状ゝてあハまぐハ不忠義そのなかなり。お身を疏してその後
に上館より下るまで食出べき残虚ごとして吾一個あれとろに前様との難
題難問哥とせ成て這回の發頭人なりと罵まり。又當主次男引捕へ鞫問せんと
あるなり。身のよお危きと累ね卵のやくるまでバ深く旅店に忍ばせてまづ
吾このとを叙やまぬ。然れども年の明るバよき便宜のあるなよう。その節到らバ
若も解なん一向時節を俟に若ど。元来自ら悪せる所の災ハ害にあるざるまでバ意志
ハ皇天誠を照して。父なま夫婦幸厳なるなるんハ今暫時の間なり然まべあん身も

如此心得て。人く心を悩ませど。稚児大事に備へて。吉左右と俟てあるまと。
ぼあの人ど心あの正月の大望が。万人如くに成就ハて。至るを忍まぬ生の間
て。所詮家あの飯らまず。仏助に依てその一命を。把ぎや国らまば。差然のあ
ば三條あて。この程逢ーが一生の願見をさめあるりやせん。世あの日待まー貞
列の女子と生まれ来るぐるも。初の為命ぐあの何事ぞと思へばいとで哀まれあるりて。
思のだの鶴うちかむ旅千代い出てその如くるる。作の特ちいあり見れど差ぎ
旅宿の隠まに居りて。出さまるべまと一層の福ひともありやせんと彼を看よ
まと思ふあの。さぬ立ちのの涙あり

忠勇阿佐倉日記第三編巻之二終